



# 第9号

# パンダ通信

2009年12月 18日発行

発行・問い合わせ先

第8号より、リニューアル!

特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2階

TEL 052-253-7550 FAX 052-253-7552

## 中国・四川大地震パンダタオルプロジェクト

2008年5月12日、中国・四川省をM8級の地震が襲いました。死者・行方不明者8万人以上、数百万人が避難生活を続ける大災害に対し、私たちは「忘れない、思いをはせる、気持ちを届ける」を合言葉に日本からの支援策を探ってきました。そこで生まれたのが「パンダタオル」です。見た目はかわいくとも、被災地と私たちをつなぐメッセンジャー。当通信は、パンダタオルをめぐる活動や被災地の状況をお伝えしながら、復興支援への協力を呼び掛けます。

## 活動報告

日付	内容	場所/主催
(報告会) 11月3日	中国四川大地震パンダタオルプロジェクト第5回現地報告会	名古屋国際センター/RSY
(ボランティアDAY) 11月4日	ミニ報告会	RSY事務所/RSY

### 「中国四川大地震パンダタオルプロジェクト第5回現地報告会開催」



「現地報告会の様子」

11月3日(火・祝)、名古屋国際センターで5回目の現地報告会を開きました。今回は、CODE 海外災害援助市民センターの吉椿雅道さんから1年半たった現地の様子をうかがい、約一週間前に現地を訪れた「中国四川大地震応援団 第三次パンダタオル班」のメンバー8人のうち6人が、被災者との交流について報告しました。大学の先生や一般の方を含めた約20名の参加者からは、「復興や災害支援という一方通行の支援というイメージが強いですが、そうではなくお互いに学び合うという関係が大切だと思いました。」「今後、中国から学んだことを日本の方に伝えることが重要だと思いました。」など、今後のパンダタオルプロジェクトについての提案も出されました。そして来年予定している3月の中国訪問に参加したいという声も聞かれ、来年につながる報告会となりました。

## パンダ通信 第9号

## — 被災地、四川は今 —

CODE 海外災害援助市民センター 吉椿雅道

ひどい時は数メートル先も見えないくらいの霧がたつ。冬場はほとんど太陽が見えず、その為に気温も上がらず寒い日々が続く。これが今の四川の被災地の冬である。最大の都市、成都でも多くの人々が1年半前に大きな地震があった事さえ忘れてしまったかのようにも見える。

未だ約5千名の方がガレキの下に眠っている北川県城は元の場所での復興を断念し、町ごと移転する事になった。新しい北川県城は約20kmほど山を降りた平野部に現在、対口支援の山東省によって大規模に建設されている。この約10km<sup>2</sup>の新しい町には県城での生存者、原住民、新住民と合わせて約6万人が暮らすことになる。そこには居住、行政、教育、文化、産業などの様々なエリアなどが建設される。だが、これまで山の谷あいにも暮らしていた人々がこの真新しい町でどのようにアイデンティティーを保っていくのだろうか。

あの未曾有の災害から1年半が過ぎた今、被災地のあちらこちらで様々な問題、課題も顕わになってきた。被災地が広大な面積である事、膨大な被災者の数などによって様々な支援がいきわたっていない。政府による強大な支援システムと民間NGOなどの支援がうまくかみ合っていないようにも見える。対口支援の対象である18の市・県では莫大な額を投入して、インフラはもちろん数億円の立派な学校、病院、政府公舎などが非常に速いスピードで建設されている。一方、その18の対象にもれた他の被災地では資金不足のため学校はおろか、住宅再建さえもなされていない所もある。一方、汶川県では清の時代の街を復元しようと見事な木造の街並みが再建され、震災を機に伝統文化の復興にも尽力している。

CODEの支援してきた北川県光明村では住宅再建を終え、これから多額な借金を再び出稼ぎによって返済していかなくてはならない。そんな状況の中、先日、第2回目の「中日友好祭」を行った。日本からも学生、NPOの方々など約40数名に参加していただき、双方の歌や踊りの披露で多に盛り



「復元された清代の街並み」

り上がった。惜しくも祭り当日は激しい雨に見舞われ、ビショビショ、ドロドロの祭りになったが、村人は誰一人中止しようとは言わなかった。村人の祭りにかける思いと我々に対するもてなしを強く感じた。この祭りで確実に人と人がつながった。この祭りが、そしてこのつながりが、少しでも被災した村人にとって厳しい現実に向き合っていく一助になればと願う。

大きな犠牲をもたらしたこの四川大地震の復興はまだ始まったばかりである。様々な問題・課題も多いが、僕達に出来るのは、ただそばで寄り添うことである。



「光明村の祭り」

# 10月24日(土)～27日(火) 第3回現地訪問報告

10月24日(土)～27日(火)に第3回現地訪問として、RSYスタッフなど8名が名古屋から中国へ向かいました。今回は、復興の現状を把握するとともに、10月26日の光明村のお祭りに参加しました。

## 【参加者】

- ・RSYスタッフ：関口威人
- ・ボランティア：伊藤聖也さん、村瀬晴香さん、浦野恵理さん、椿佳代さん、後藤茂元さん  
清水紀子さん、鈴木ひさ子さん

## 【スケジュール】

- ・日程：10月24日(土)～27日(火)
- ・訪問先：中国四川省綿陽市北川県香郷光明村など
- ・内容：光明村のお祭りに参加し、メンバーは浴衣を着て「炭鉱節」を披露  
パンダタオル約450個、熊猫通信450通、ラッシュジャパンの  
ソーブ190個をお届け



日程	内容
10月24日(土)	中部国際空港→成都(上海経由)へ移動、宿泊 CODE 海外災害援助市民センターの吉椿雅道さんより現状報告 オリエンテーション 宿泊：Sim's cozy Garden Hostel
10月25日(日)	午前：案県北川県城見学 午後：北川県香泉郷光明村にて、祭りのリハーサル 前夜祭(キャンプファイヤーを囲んでのダンス) 宿泊：ホームステイ(光明村にて)
10月26日(月)	2009年中日友好北川光明村の祭りの開催 浴衣で「炭坑節」を披露。光明村の方と一緒に「炭坑節」を踊る。昼は光明村の皆さんと昼食。パンダタオル、熊猫通信、ラッシュジャパンのソーブを贈呈。 最後に日本人全員で「世界に一つだけの花(SMAP)」を合唱
10月27日(火)	成都→中部国際空港(上海経由)

## 【株式会社ラッシュジャパンのソーブをお届けしました】



「ソーブを手にとる子どもたち」

ラッシュジャパンのソーブを見せると、たくさん子どもたちが集まってきました。「これ食べられるの?」「いろんなにおいがするね」などと興味津々でした。

大人たちの中で、「洗濯には使えるの?」と聞く女性もいました。また男性の方で、「若い女の子が使うものでしょ」と遠巻きに見ら



れる方もいましたが、みなさん石鹸に関心を持たれていました。

石鹸を受け取った子どもたちは、「ありがとう」と笑顔を見せていました。

## 【参加者の感想】

・村の人たちの笑顔が印象的でした。特に子どもたちは元気いっぱい、その日初めて会った僕に何の抵抗もなく接してくれました。とても楽しい時間を過ごすことができました。ぜひまたみんなに会いたいです。



・光明村を訪れて「地域のコミュニティ」の大切さを感じました。光明村で彼らの「またみんなに会いたい」団結力を様々な場面で見ることができました。「みんなで頑張る」、それが被災地復興に最も大きな力を与えるのではないのでしょうか。



「即興でテントを作りました」



「少しでも支えになったら」

みなさんが、被災後どのように気持ちを整理し、乗り越えようとしているのか、その気持ちを聞いてみたいと思いました。

・被災者は、被害の程度によって自分のことを話せなくなることがあると聞きました。今回地震について深くは語り合えませんでした。日本から訪れた私たちと一緒に笑顔で過ごした時間が、励まみや支えになってくれたらと願って



「ねえちゃんって呼んでくれた」

んでくれたことがうれしかったです。また、後ろから近づいてきて、さっと傘を差し伸べてくれたりと、村の人たちのやさしさに触れることができました。お別れのときに「今度はいつ来るんだ？」と言ってくれたことが印象に残っています。子どもたちだけではなく、大人たちもフレンドリーでした。初めて会った私たちに親切にしてくれたことに対して、今までの信頼関係がないとできないことだと感じました。

・被災してから約1年半という時間が経過していることもあり、生活の再建も大分進んでいました。被災直後の村の状況を自分の目で見ていませんが、被災しなければ光明村に多くの日本人が訪れることはなかったと考えると、複雑な気持ちになりました。

・雨が降り出したお祭りの舞台上、皆で和気あいあいとテントを設営する様子を見て、被災時も積極的に助け合いをしていたのではないかと思います。また薪で火を焚き調理するなど、自然の中で生きる術を備えている姿を垣間見て、現地の人々の災害に対する知恵を学ぶ機会となりました。

・言葉の壁があり、聞きたいことが聞けなかったのが残念でした。パンダタオルを介して思いを伝えてきましたが、今回の訪問は「支援する」ということを考えさせられました。

・自然の驚異はすごいけれど、人間の知恵や備えで妨げることもあると思います。それをしなかったことで、他人にも自分にも矛先が向き、悔やまれるでしょう。今回の被害は、手抜き工事があったと耳にします。皆さんの精神的苦痛は計り知れないと思います。中国の人たちは、とてもたくましく映りますが、それを国民

性としていた自分に少し反省しました。今回聞くことができなかったのですが、



「言葉が通じなくても思いは伝わる」

います。

・現地では、被災された皆さんからもてなしを受けました。言葉が通じなくても思いを伝わらせ合うことができると実感しました。ボランティアは、即ち「コミュニケーション」だと感じています。

・中国語で子どもたちが「恵理ねえちゃん」と呼



「たくさん笑顔に出会えました」

\*\*\*\*\*

事務局より 10月1日より、事務局が移転しました！ [NPO 法人レスキューストックヤード事務所]

名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階 地下鉄桜通線・名城線「久屋大通駅」より徒歩 3 分